

世界教会史から窺うキリスト教

第1回 原始キリスト教・古代
- アウグスティヌスとキリスト教会の形成 -

1 キリスト教の歴史を学ぶということ

- ・マクロな動き、ダイナミックな活動
- ・魅力的で個性的な個人、伝説的な人々
- ・なぜ、人間は伝説を作るのか、なぜ、伝説を欲するのか
歴史自体 = 史実 / 歴史研究の成果 / 歴史小説 / 歴史という装いのフィクション
/ 単なるフィクション
ダヴィンチ・コード
テキストの空白 共同で読むことの必要性

「12:1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか」(ヘブライ人への手紙)

2 原始キリスト教(1世紀)から古代教会へ

- ・イエスの宗教運動から、制度的な宗教へ
1世紀の後半から徐々に、牧会書簡・使徒教父文書において確認できる
キリスト教の基盤(教義・制度・組織)の形成
- ・迫害下の教会(ユダヤ教とローマ帝国)から、ローマ帝国の国教(4世紀)へ
地中海世界・ヘレニズム世界へ ヨーロッパ・キリスト教世界の形成
新約聖書がギリシャ語で書かれた意味、都市の宗教としてのキリスト教

3 アウグスティヌス

- ・西方教会(ラテン世界のキリスト教 ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の共通のルーツ)最大の教父
西方教会の基盤の形成
- ・人間は変わり得る(神にあって)

4 アウグスティヌスの回心

- ・若きアウグスティヌス(354-430年)

聖人アウグスティヌスの放蕩時代？

- 13 才 (367 年) : タガステ (故郷) マダウラ
- 16-17 才 : カルタゴ (学生時代) 或る女性と出会い・同棲、マニ教に接近
- 18 才 : 息子誕生 (アデオダートゥス)
- 29 才 (383 年) : ローマへ
- 30 才 (384 年) : ミラノへ (国立大学教授)
- 31 才 : 母モニカ、ミラノへ。女性との別れ (アフリカへ、修道女となった?)
ミラノでの回心
- 33 才 (387 年) : モニカの死
- 34 才 : 故郷へ
- 36 才 (390 年) : 息子アデオダートゥスの死
- 37 才 (391 年) : ヒッポ・レギウスの司祭 (396 年から司教)
- 43 才 (397 年) : 『告白』執筆開始 (400/401年に完成)
アンブロシウスの死

・二人の女性：母モニカと同棲の女性（妻）

人間性 = 両義的存在

通説ほど、人間は単純ではない

母の両義性：聖女？ あるいは悪女？

母マリア

母と妻の板挟み

・原罪：妻との別れ 空しさ

「空しさを埋めようとする空しい努力」「いっそうの空しさ」
神の恩寵のみがこの空しさからの救いを与えることができた

「7:15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきません。22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、23 わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。」(ローマの信徒への手紙)

5 キリスト教徒として生きる

・地の国と神の国の間

地上での信仰生活：二つの法則（二つの国）が信仰者の内でせめぎ合う

・「共に生きる生活」(ボンヘッファー)

神の前に一人で立つ

信仰の仲間との交わり

モニカ、或る女、アンブロシウス

<文献>

1. アウグスティヌス 『告白』(中央公論社・世界の名著、岩波文庫)
『神の国』(岩波文庫)
2. 山田 晶 『アウグスティヌス講話』新地書房
3. 土井健司 『古代キリスト教探訪 キリスト教の春を生きた人々』新教出版社
4. 金子晴勇編 『アウグスティヌスを学ぶ人たちへ』世界思想社